

【書評】

六鹿茂夫編著『黒海地域の国際関係』

(名古屋大学出版会、2017年、x+408ページ)

吉井昌彦

(神戸大学経済学研究科教授)

Shigeo Mutsushika, ed., *International Relations in the Black Sea Region*
(Nagoya: The University of Nagoya Press, 2017)

Masahiko Yoshii

Professor, Graduate School of Economics, Kobe University

本書は、科学研究費助成事業「黒海地域の国際関係—4次元分析における学際的総合研究」(2008~11年度、研究代表者：六鹿茂夫)を基礎としながらも、2014年のウクライナ・マイダン革命、クリミア併合後の新たな緊張関係を視野に入れ、黒海地域の国際関係を、歴史、経済、域内国際関係、域外国際関係の4次元から総合的に分析しようとする、きわめて時宜を得た研究書である。評者は、ルーマニアを専門とするものの、黒海地域を扱ったこともなく、また本書で主として扱われる政治も門外漢であるため、十分な書評とはなりえないが、お許し願いたい。

本書を要約すると次のようになる。なお、紙幅の制約から各章のタイトル・著者名は省略した。この点もご容赦願いたい。

第I部「黒海の地域性—域内協力と域外関係」は、黒海地域の国際関係を歴史、経済の観点から概観している。歴史的に見れば、黒海は、紀元前のギリシャ世界、紀元後はローマ帝国・東ローマ帝国世界の成立、そして東ローマ帝国衰退期の分裂の時代を経て、15世紀にオスマンの海となったが、18世紀の南下政策によりロシアが、19世紀にはイギリスを含む西洋列強が、そして国民国家の成立によりバルカン諸国がアクターとして加わる。第2次大戦後の冷戦期には、東西二陣営の軍事ブロック対立の最前線の一つとしてアメリカも黒海地域の安全保障に関わるようになるが、東欧革命により安全保障の真空状態に置かれる。しかし、ブルガリア、ルーマニアがEU、NATOに加盟し、旧ユーゴスラビア諸国、ウクライナ、ジョージア等がEU、NATOへの加盟志向を強め、色革命が起きる中、ロシアは欧米および「近い外国」に対して強硬な政策をとり始めた。(第1~3章)

しかし、このような中、地域協力関係も築かれ始めている。この中心が、1992年にトルコの主唱により設置された「黒海経済協力機構(BSEC)」である。現在の加盟国数は12カ国であり、黒海貿易開発銀行の設立など一定の役割を果たしているが、その規模、役割はまだ小さなものにとどまっている。(第4章)

第Ⅱ部「域内国際関係」は、ロシア、トルコ、ウクライナ、南コーカサス、バルカンという黒海地域の国家（群）の政治変動と外交政策がまとめられている。ロシアから国際関係を見ると、対トルコでは、1992年に基本関係条約を締結し、天然ガス供給を中心に経済関係を発展させてきた。しかし、ウクライナ、南コーカサス諸国の多くは、ロシアからの離反を試み、1997年にGUAMを結成し、2000年代の色革命を経て、親EU・NATO動きを強めていく。このような中で、プーチンは、GUAMの切り崩しとエネルギー資源の利用により巻き返しを図ってきた。（第5章）これに対してトルコは、ソ連崩壊直後にアゼルバイジャン、ロシア国内のタタールスタン等との関係構築を図るものの、また最近では2015年11月にロシア軍機を撃墜するものの、全般的にはロシアとの緊張関係の緩和に努めてきた。（第6章）ロシアとトルコという大国の狭間で、その他黒海地域諸国は多様な動きを見せてきた。ウクライナは、「西（欧米）か東（ロシア／CIS）」の選択で揺れ続けてきた。1997年、黒海艦隊の地位・駐留条件の解決とともに、NATOとの「特別のパートナーシップ関係に関する憲章」が調印され、オレンジ革命後、ユシチェンコ大統領はNATO加盟準備を進める。2010年、ヤヌコヴィチ大統領は、ロシア艦隊の駐留延長に合意するとともに、NATO加盟プロセスをゼロに戻したが、2013年のユーロマイダン後、ポロシェンコ大統領は、NATO加盟に再び方針転換するとともに、EUとの連合協定に調印する。しかし、クリミアがロシアに併合され、ルガンスク州とドネツク州はウクライナからの独立を宣言する。EU／NATOとのパートナーシップ関係はウクライナ安保にとって十分ではなかったのである。（第7章）南コーカサスでは、ジョージアは反露、アルメニアは親露、アゼルバイジャンは親トルコであり、ジョージア、アゼルバイジャンは、ウクライナ、モルドヴァと共にGUAMを1997年に結成し、欧米との提携を図ってきた。また、それぞれに南オセチア・アブハジア、ナゴルノ・カラバフという紛争問題を抱えている。（第8章）バルカン諸国は、西欧、ロシア、オスマン帝国の境界型周辺という性格を有してきたが、現在は、EU、NATOの東方拡大により、EUの辺境へと変質しつつある。（第9章）

第Ⅲ部「黒海地域の主要課題」では、非承認国家、経済、トランスナショナリズムといったイシューごとの論点整理が行われる。非承認国家問題では、黒海地域の非承認国家を概観した後、黒海地域は、民族や宗教、言語、文化が多様である中、地政学的に干渉や侵略を受けやすく、民族間の緊張が多く存在してきたため、また体制転換の混乱が生じたため、多くの紛争が発生し、長期化してきたことが説明され、非承認国家問題の解決シナリオについて議論がなされている。（第10章）宗教とトランスナショナリズムの関係では、南オセチア、沿ドニエストル、クリミア・タタールという紛争地域の宗教関係者へのインタビューを通して、人々が「主権国家」の線引きを超えて人々が動いている（跨境する）ことを生き生きと描き出している。

（第11章）経済関係では、域内ではロシア＝ウクライナの交易関係が中心であるものの、黒海地域全般で見れば、域外（遠心力）との交易関係が大きいこと、そして、ロシアとの関係を迂回するためのパイプライン敷設が議論の中心となっていることから、黒海地域諸国の共存共栄は当面期待できないことが主張される。（第12章）最後に、ウクライナのロシアからの天然ガス輸入をめぐる企業の動きを振り返り、ウクライナがロシアの天然ガスがもたらすガス利権を利用してきたこと、ガスピロムにとってウクライナは難しい商業相手であったことを示している。（第13章）

最後に終章では、本書が黒海を一つの地域対象とした歴史学的、政治学的、経済学的、社会的な研究であること、その中で、オスマン帝国から始まる帝国の遺産が多くの紛争、非承認

国家を生み出してきたこと、ロシア、トルコが大国として影響を及ぼしてきたこと、今日の諸問題は、冷戦後の新しい情勢のもと、個々の小国が国民国家を形成するための産みの苦しみの中で表面化したものであるが、日々の生活を送っている人々は、時として、「主権国家」の線引きを超えて動く（跨境する）こと、が明らかにされたとまとめられている。

本書の特長を総括すると次の3点にまとめることができよう。

第1に、これまで馴染みの薄かった黒海地域の国際関係を歴史、地理、政治、経済の観点から総合的に分析していることがあげられる。とくに、第I部で概説された黒海地域の国際関係の歴史を基礎に、第II部でロシア、トルコ、ウクライナ、南コーカサス、バルカンという各国（群）ごとの国際関係が、そして第III部で非承認国家、宗教、経済というイシューごとの国際関係が総合的、複合的に分析されていることは本書の最大の特長であろう。

第2に、冒頭に述べたように、本書は科学研究費助成事業「黒海地域の国際関係—4次元分析における学際的総合研究」（2008～11年度）を基礎としているが、その後の2014年に生じたウクライナ・マイダン革命、クリミア併合後の新たな緊張関係を視野に入れた黒海地域の国際関係をも対象として、入念な分析が行われている。研究代表者であり、本書の編者である六鹿教授の努力は並大抵ではなかったことが容易に予想できる。

第3に、これらの分析の結果、次のような重要な点が明らかにされた。第1に、黒海地域が「トルコの海」であった時代から、18世紀にロシアが、19世紀にイギリスを含む西洋列強とバルカン諸国が、第2次大戦後の冷戦期にはアメリカも黒海地域の国際関係のアクターとして加わってきたこと、その中で歴史、社会、文化等の多様性が斑状に残されてきたことが、紛争あるいは非承認国家を含む諸問題を生んできた。第2に、現在の最大のアクターであるロシアは、黒海地域における国際関係の維持、拡大のため多様な動きを示しているが、その鍵となるのはパイプラインを利用した石油、天然ガス供給である。

終章において、マクロとミクロの複眼的視点による分析の深化が今後の課題として挙げられているが（384頁）、評者として次の2点の課題を指摘したい。

まず、上述のように、クリミア併合後のウクライナ＝ロシア関係を論じていることは、本書の特長の一つであるが、そのことにより視点が分散してしまったことは否めない。例えば、トルコを含めた、ウクライナとロシア以外の黒海地域諸国がクリミア併合やウクライナ東部問題をどのように評価しているのかといった議論が重層的に行われていけば、良かったように思える。クリミア併合やウクライナ東部問題がどのように解決されていくのか、あるいは深刻な問題であり続けるのかを判断するには今暫くの時間が必要であろう。

次に、2010年代に入り、黒海地域の国際関係に、「一带一路」を主唱する中国という新たなアクターが加わってきた。もちろん、そのことは本書でも指摘されているが（337頁）、バクー－トビリシ－アハルカルキーカス（BKT）鉄道（225頁）が2017年10月に中国の支援により開通したことにより、この指摘は現実のものとなってきた。新たな視点からの分析の必要性がしだいに増してくるだろう。

しかしながら、本書が我が国初の黒海地域の国際関係を多角的視点から総合的に分析した初の専門書であり、意図する課題は十分に達成されていると評価できる。新たな視点からの分析を付け加えながら、本書が利用した多角的視点からの分析をさらに深化させることにより、我が国だけでなく国際的にも、黒海地域の国際関係の理解が進むことを期待したい。